

住民の声、現地の空気を感じながら、玄海再稼働阻止を！



玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会 永野浩二

九州電力が玄海原発再稼働申請を行った夏以降、何度と発電所へ足を運んだ。駐車場には下請企業の労働者を運ぶバスや関係者の車がズラリと並ぶ。周辺の駐車場もどこもいっぱい。夕方5時過ぎ、ゲート付近は帰宅ラッシュで渋滞。再稼働へ向けて着々と準備を進めているのだ。

●11月30日、「原子力防災訓練」が佐賀県、玄海町、唐津市、伊万里市の主催で行われた。去年は避難先となる南東方向の小城市へ向けて玄海から風が吹いていたが、風向きで避難する方向を「混乱するから」という理由で変えず、今年もスケジュール通りに訓練を行った。

原発から3キロ弱にある定員100名の特別養護老人施設は、車イスを積める福祉車両2台だけで去年は避難訓練を行ったが、今年は搬送が困難だとして「屋内退避訓練」を行った。

30キロ圏の伊万里市は初めて住民避難訓練を行ったが、大型バス避難はさながら日帰り弁当付旅行のような緊張感のなさだった。

いざ本当に事故が起きた時には、複合災害、道路渋滞等で何の役にも立たないであろう避難訓練。住民の命を守る重大な責任のある自治体には、そのばかばかしさに早く気づいてほしい。

玄海町の小学生と住民は避難先の小城市の公民館で弁当を食べた後、「放射能の基礎知識」という講演を聞かされた。講師は原子力安全基盤機構の役人。「放射線は身近にある。こわくない。100ベクレル以下なら食べても大丈夫。隣のおじさん達の言うことは聞かないで、私達のような正しい情報をしっかり聞くように」。むごたらしい洗脳、再稼働への地ならしであった。

●12月2日、玄海原発で日本初のプルサーマル営業運転が開始された日。この日に毎年集会を行ってきたが、今年はみんなで戸別訪問、玄海町長・九電・佐賀県知事への申し入れを行った。

戸別訪問では「原発あったほうがいい。豊かな生活ができない」「帰れ！」「電気が足りているなら、動かさないでほしい」「原発いらないと云える身分ではない」「地元で声あげられないから、みなさんにやってもらえてありがたい」……。初めて玄海町を歩いた東京、大阪、福岡の仲間達は、原発を目の前に暮らす人々の不安や心配な気持ちを肌で感じたようだ。

町長に対して「規制庁は県議会で『絶対に安全な状態は永久に来ない』と言ったが、自治体は住民を放射能から絶対に守るべし。再稼働を認めず、全国に先駆けて原発ゼロのまちへ」と要請。要請文に織り込んだ町民の声を読み上げる石丸代表の声は涙まみれ、だけど力強かった。

●12月13日、佐賀県議会原子力特別委員会は井野博満・東京大学名誉教授を参考人招致した。

私達が「慎重な立場の専門家の意見を聞く場をつくってほしい。井野氏を推薦する」と要請したことに県議会が応えた形。井野氏は「原発は危険で汚いエネルギー。再稼働は暴挙。技術的に可能な安全対策はすべて実施すべき。完全なる対策は玄海原発を廃炉にすること。技術の立場からは即時原発ゼロ。原発存続の是非は公開の議論の場をつくり、市民の意見を踏まえるべき」と陳述、県議全員（自民党が8割）が参加する公的な場で、画期的なものとなった。

●こうした中、11月13日、原発政策の本丸である国を訴えようと、国・原子力規制委員会に対して、玄海原発3・4号機の運転停止命令を求めて、佐賀地裁に提訴した。これまでに起こした被告九州電力の3つの裁判にもう1つ加わった。「福島原発の放射能汚染水問題のように、重大事故時に放射性物質の放出を防ぐ措置がまったく不十分であること」「基準地震動の設定が二重基準によって過小評価となっていることを」を軸にして、全国384名の原告とともに闘っていく。

2014年も、法廷内外で、ともに怒り、ともに行動できる人を1人ずつ増やしていきながら、原発再稼働阻止、原発ゼロ社会の実現へ向けて、全国の皆さんとともに前進していきたい。